

# 平城京右京北辺北方の調査

## —第610次

### 1 はじめに

当該地は平城京右京北辺の北方に位置し、小高い丘状の高まりの周囲を取り巻くように低い部分がめぐる、やや特異な現況地形を呈する場所である。自然地形にしては不自然であることや、この地が右京北辺に接することと、近代の地籍図や遺存地割などでも確認できることから、このような地形が近世以前に形成されていた可能性が高いとみられていた。また、歴史地理学の成果や近隣住民による聞き取り調査では、この地が「まるやま」と呼ばれる田地であったとの伝承もあり、円墳などの可能性も考えられた。そのため、それらの可能性を検証するための学術調査をおこなった。

調査期間は2019年2月18日から27日。調査面積は47m<sup>2</sup>である。

### 2 基本層序と遺構

現在、民家が建つ高まりに向かい、ほぼ東西方向のI区と南北方向のII区を設定し、発掘調査をおこなった(図231)。基本層序は、耕土・床土(20~30cm)の下に、鎌倉時代から室町時代頃のものとみられる黄橙色粘土の整地土

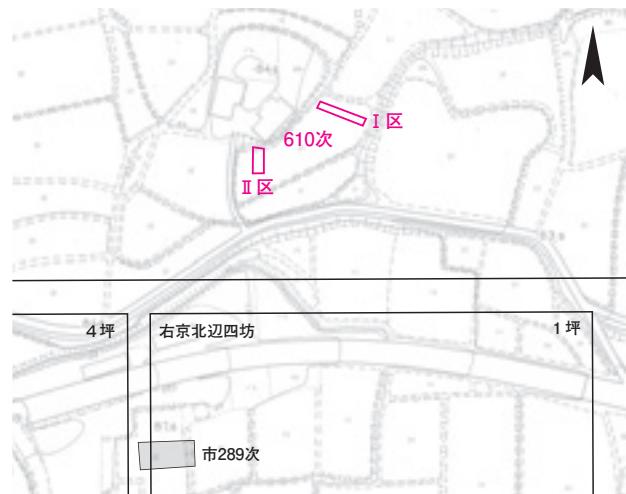


図231 第610次調査区位置図 1:2000

(10~15cm)があり、その下に40~90cmの黄灰褐色粘質土が厚く堆積することを確認した。この黄灰褐色粘質土は人為的な積土とみられ、奈良時代の瓦片を含むことから、古代の整地土とみてよからう。この整地土の下には地山とみられる無遺物層の灰黄色粗砂と灰白色粘土を検出し、地山面は高まりの中心に向かって高くなることを確認した。

I区の西端では、古代の整地土の上面で溝SD3461を検出した(図232)。仮に、この遺構が円墳であった場合、周濠が高まりに沿ってめぐる可能性も考えられたため、南側にII区を設置して確認をおこなった。その結果、II区では溝は検出できなかった。しかしながら、基本層序はI区同様、古代の整地土(黄灰褐色粘質土)が厚く堆積することや、中世の整地土(黄橙色粘土)が続くことを確認した。一帯の地形造成が古代にさかのぼる可能性が高いことを確認することができた。II区では溝SD3461の続きが確認できなかったものの、さらに北側に溝がめぐる可能性も否定できず、今後の調査に課題を残すかたちとなった。(神野 恵)

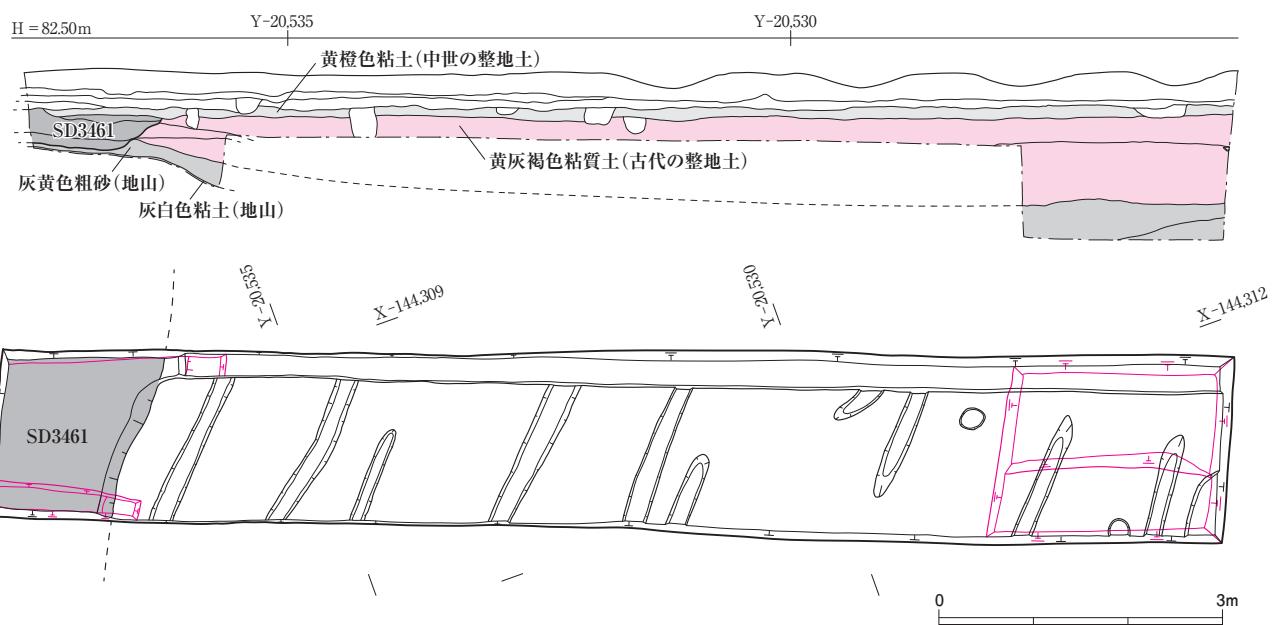


図232 第610次調査I区遺構図・北壁土層図 1:80